



CHUO UNIVERSITY ROWING CLUB 中央大学漕艇部

2024年4月3日

漕艇部マネージャー：久保陽菜

今回は、4月15日～4月22日に行われるパリ五輪アジア・オセアニア大陸予選（韓国・忠州）で軽量級ダブルスカル代表として出場する宮浦真之さん（2019年卒業/文学部）にお話を伺いました。



※バウが宮浦選手

Q：ボートを始めたきっかけをお聞かせください。

A：中学生の時、もともとはサッカー部に入ろうと思っていましたが、サッカー部の体験入部がいっぱいになってしまい帰ろうとしていたところボート部の先輩に誘われたのがきっかけです。

Q：ボートをやっていて大変だったことや楽しかったことをお聞かせください。

A：練習で特に大変だったのは中学生の時です。ボート部が一番きついと言われていて、それをやらされている感がありつらかったです。一方で、身体的には常にきついのですが、精神的にきついと感じることは少なかったですね。楽しかったのは、中大時代、寮で仲間とワイワイしながら日本一を目指していたことです。やらされているのではなく、自分でやろうとするのが楽しいです。

Q：宮浦さんが感じるボートの魅力を教えてください。

A：水上でやるスポーツということ、また、ボートの歴史やボートを取り巻く色々な要素が好きです！あとは、ボートのコミュニティーもボート競技の魅力だと思います。

Q：辛い時のメンタル管理はどのように行われていますか？

A：やめる理由もやめない理由もなく、メンバーと同じ練習量をこなせるように流れに身を任せるようにしています。周りの存在があるからこそ続けられました！



※2018年アジア大会優勝、右が宮浦選手

Q：アジア大陸予選に向けての意気込みをお聞かせください。

A：当然勝ちたいとは思っていますが、そのためには全力を出すのみ！！クルーとして全力を出すことに集中し、そこに結果がついてくると信じています。

Q：最後に後輩たちへ一言お願いします。

頑張る過程でいろいろな人に出会います。考え方を少し変えるだけで不正解が正解になります。「インカレ優勝」というシンプルな言葉をどれだけ深くとらえられるかが重要だと思います。これらのことを楽しみながら考えていってほしいです。

インタビューを終えて：

今回は私にとっての初めてのインタビューであり進行がうまくいかない部分もありましたが、宮浦さんがやさしく対応してくださり程よい緊張感の中進めることができました。ボートをやっていて大変なことを伺ったときに一番大変だったのは中学生の時だとおっしゃっていたのが衝撃的でした。日本代表としてご活躍なさっている現在の方が周りからのプレッシャーがあり精神的にも肉体的にも大変なのだと思います。ですが、やらされていると感じていた中学生時代よりも、自ら進んで練習している今のほうが楽しいと聞き驚きました。また、ボートの魅力を伺ったときに、ボートを取り巻く色々な要素が好きとおっしゃっており、宮浦さんのボート愛が伝わり、私はボートの歴史などを詳しく知らなかったのもそれらに対する興味も湧きました。

今回は私が知らなかったボートの一面やボートに対する選手のモチベーションを知る貴重な機会となりました。改めて、今回はインタビューさせていただきありがとうございました！

2年マネージャー：久保陽菜

写真提供：
NTT東日本漕艇部